

国内研修レポート

「夜の街歩きスタディツアー」

「青少年保護法は表現の自由の侵害だ。日本は性的な本の販売によって、欲求不満を発散するから、性犯罪率が低いのだ」という主張を私はネット上で若者が誇らしげにするのを見よ。

果たしてそうなのだろうか。

彼らの見下す「性犯罪率の高い国」とは、「性犯罪に厳しい国」のことであり、性犯罪者を放置せずに積極的に検挙し、認知件数が多いからこそ、性犯罪率が高いことが露呈している国が大半ではないだろうか。

日本はただ、臭いものに蓋をして誤魔化しているだけで、その蓋を開けてみれば、醜悪な大人たちによる、青少年の性犯罪の助長が行われているのでは無いだろうか。

私は、今回の国内研修で、このような考えが、決してただの仮定ではないことを思い知ることとなった。

2014年12月12日金曜日、私は国内研修という形で、colabo主催の「夜の街歩きスタディツアー」に参加させていただいた。

ツアー目的はJK産業の現状を認知する大人を増やすこと、10数名程度の少人数で行われるそのツアーは、19:00から、夜の顔に姿を変えた歌舞伎町で開始する。

始め、歌舞伎町の入り口でcolaboの社員の方は「スカウトの人が立っていると思うから、注意深く見てごらん」とおっしゃった。

私は、歌舞伎町には2度・3度ほどしか行ったことがなかったが、正直言って、そんなスカウトの人がいた記憶があるかといわれれば、肯定はできない。

この言葉を言われた時だって、おそらく1人・2人見つけられれば良い方だろうし、そのくらいしかいないだろうと、甘く見ていた。

しかし、注意深く観察すると、その数は非常に多い。数m感覚にスカウトマンが単独・あるいはコンビを組んで立ち、町を歩く女性にさりげなく視線をやり、獲物を得ようと観察する。

歌舞伎町という町は、裏側を意識化におくのとおかないのとでは、面白いくらいに全く異なる町の顔を見せるのだろう。

無意識の中では、大量の客引きの姿や店の女の子の斡旋を行っている無料案内所といった存在は、まさに錯覚のように消えて無くなってしまふ。

『女子高生の裏社会』の著者であり、本ツアーの考案者ともいえる、仁藤夢乃氏は、現在「生活安全圏」とよばれる、家庭環境・金銭面ともに良好である女子高生が、裏の歌舞伎町のような世界に足を踏み入れることが多い問題を指摘しているが、上記のように無意識化のフィルターを通して見る町は、なるほど「生活安全圏」の子供がフラフラと足を運んでもおかしくない。

そうして迷い込んだ子供を、歌舞伎町の裏側にいる大人たちは巧みに誘い込んで、自分たちの世界へ引き入れてしまうのだろう。

J K産業のスカウトマンや、彼女たちを買う大人たちは、女子高生の心をつかもうと躍起になっている一方で、ケアをすべき大人たちは、無情にフィルターを静かにかけて、少女の悲鳴を無視してしまう。非常に考えさせられる現実が、フィルターをはずした歌舞伎町には存在した。

子供を利用しようと試みる大人たちの方が、私たちよりもずっと子供の助けを求める声に敏感で、いち早く反応して、少女を囲ってしまうという現状は、何ともみっともない話であると私は思う。

次に私たちは、秋葉原へ移動し、実際にJ K産業で働く女子高生にインタビューを行った。わたしが質問をした少女は、そのような産業に携わっているとは思えないほど、気弱そうで小さな声の少女だった。

私「学校へいつてるの?」、少女「いいえ」、私「20になってもここで働くの?」、少女「いえ! 20になったら・・・普通のお店に就職して、働きたいなあ・・・とは思ってます。」眉を下げながら、将来の思いを語る彼女は、未来に対して希望を抱きながら、どこかあきらめにも似た声を発していた。

彼女たちにとって、たとえ働きに出たくても、そのための「衣食住」や「役割ややりがい」のある仕事を与えてくれる業者はほとんどないと言っても良い状態にされている。

反対にJ K産業ではそれらを惜しみなく与える振りをすることで、産業の泥沼に抜け出せないようにしているのだ。

少女もそれをわかっているのか、私にその判断はできないが、自分と大して歳が変わらない少女が、学校にも行けず、就職に頭を悩ませることもできず、小さく情けない声音で、将来の展望を諦め同然に語るのは非常に心にくるものがあった。

そして、そのような状態にさらされている少女がいることを、いままで20年生きておきながら、まったく知らずにいたという自分に腹も立った。

秋葉原でインタビューを行ったのち、colaboさんから話をお伺いする時間をいただいた。

少女を買う大人たちは「自分たちはお金を払って、彼女たちを買っているし、彼女たちには衣食住を与えているのだから、この関係はイーブンである。」と主張する。

これに対して、colaboは、そもそも衣食住が無いことが問題であること、そして、彼女たちを買うことで、衣食住を探す意欲を奪っているのだと主張し、本当は自分たちが、彼女たちに衣食住を与えなければいけないのだと切に訴えていた。

まったくもってその通りであるといえる。裏社会は少女たちを人間として大切に扱っているのではなく、あくまで商品として良い価値を得るために衣食住と、やりがいを与えているだけだ。そこに少女たちが求める本当の温かさはないし、そうすることで少女たちは、表の世界からどんどん切り離されて、孤立していく。

おそらく、彼女たちの生活範囲は今や、同年代同性との関わりよりも、大人の異性とのかわりのほうがはるかに多いのだろう。

それは彼女たちの成長を確実に妨げるといえる。発達心理学において、思春期周辺の同性との関わりは、子供のアイデンティティを確立させる重要な役割であることは、はっきりと明らかにされている。

寄り添ってくれる大人も、ともに歩む仲間もない、そんな環境に身を置かせることの、どこがフェアだといえるだろうか。

そして、これは私たちにも責任はあるのだ。

見たくないモノを見ようとせず、表の世界ばかり眺めてJK産業なんて、しょせん「テレビの中の世界の話」として切り捨ててきた、私たちも確かに彼女たちを苦しめてきた一人なのだろう。

このような世界があることを知る、それこそが、彼女たちをたすける一歩であり、その一歩は決して小さな一歩ではないと、私は思っている。

できれば、私のような大学生以外も、大人にも、子供がいるとかいないとか、そんなことは関係なく現状を知ってほしい。

これは普通的女子高生が犯罪へ転落することを防ぐだけでなく、女子高生の「関係性」という些細でありながら、何よりも重要なものを回復させる手段である。

彼女たちの居場所づくりこそが、今後大人になっていく私たちの、そして今の社会を担う大人たちの義務であると今回の国内研修で私は強く実感した。